

S.R.ランガナタンと『図書館学の五法則』を学ぶ

盛岡大学文学部 吉植 庄栄

1. S.R.ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) 略歴



1892年8月9日(現在は公式で8月12日とされることが多い)に誕生

生誕地(母の家): マドラス州タンジョール管区シヤリ(Shiyali, Tanjur District, Madras State)

※現在は、タミルナドゥ州ナガパティナム管区ジルガリ(Sirkazhi, Nagapattinam District, Tamil Nadu)

- 1897～1908年 初等・中等教育 Subhanayaka Mudailiar's Hindu High School
- 1909～1916年 高等教育 Madras Christian College
- 1916～1917年 教員養成課程 Madras, Saidapet Teacher's College
- 1917年～1924年 25歳～27歳 Collegeの数学教員(3大学)
- 1924年～1945年 Librarian, University of Madras
- 1924年～1925年 イギリスに研修出張
- 1928年 マドラス図書館協会設立、事務局長に就任
- 1931年 『図書館学の五法則(The Five Laws of Library Science)』刊行
- 1933年 インド図書館協会設立に協力。
- 1945年 ベナレス・ヒンドゥー大学に異動
- 1947年 デリー大学に異動。(1949まで) ※インド独立
- 1950年 (このころ、アメリカを中心に世界各国で講演)
- 1955年 息子が住むスイスのチューリッヒに拠点を移動
- 1957年 インドに帰国。国から勲章パドマシュリー授与。『五法則』第2版刊行
- 1958年 日本に来訪
- 1962年 インド統計大学・ドキュメンテーション研究訓練センター(DRTC)で名誉教授
- 1963年 サラダ＝ランガナタン図書館学基金設立
- 1972年9月27日 バンガロール(現ベンガルール)にて死去 享年80才

¹ 竹内愨. 図書館の歩む道: ランガナタン博士の五法則に学ぶ, 2010, p.47によると「現在の暦」とある。これが由来で8月12日は、インドの図書館記念日になっている。

2. はじめに

昨年 2022 年は、『図書館学の五法則(The Five Laws of Library Science)』(以下『五法則』)で世界的に著名なインドの図書館学者・実務家・運動家である S.R.ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) の生誕 130 周年、没後 50 年の節目の年である。

発表者は 15 年近くランガナタン研究を続けているが、ランガナタン [著] ; 竹内哲解説. 図書館の歩む道 : ランガナタン博士の五法則に学ぶ. 日本図書館協会, 2010, 295p.からは、特に多くを学んだ。本発表はランガナタンと『図書館学の五法則』の概観について紹介し、後半ではランガナタンが強く打ち込んだ仕事の 1 つである学校図書館観について解説する。令和 3(2021)年 10 月にご逝去された竹内哲先生へ追悼のはなむけとできれば幸いである。

なお発表者は、平成 24(2012)年度には国立大学図書館協会、平成 29(2017)年度に東北大学附属図書館からインドに派遣され、現地の事跡を調査する機会を得た。適宜、調査で得た情報も加えて報告をする²。

3. 『図書館学の五法則』が生まれた経緯

数学の教員であったランガナタンは、1924 年 1 月に周りの奨めでマドラス大学図書館長職の職に就任した。ところが仕事が無く、わずかな図書館利用者に幻滅する。その結果、数学の研究教育者へ戻ることを強く希望したがその後、英国派遣が決まる。

1924 年 10 月、英国に渡航したランガナタンは、図書館学の理論を学び、多くの図書館を見学した。その体験の中で、経験則による運営がなされがちな図書館業務の背後には何かしらの法則のようなものがあるのではないかと考えはじめる。つまり図書館業務の各々を帰納的に分析してみると、その最奥には何かしらの規範原理があるのではないかと考えたのである。そして、全ての仕事の拠り所となる原理が無ければ、図書館は発展しないとまで思い詰める。

1925 年 7 月にインドに戻るとマドラス大学図書館を充実させる業務に忙殺される傍ら、無意識に規範原理を考えていた。1928 年も終わりが近くなったある日、大学時代の師匠であるスコットランド人のエドワード B. ロス教授(Edward B. Ross, 1881-1947)と話していた時、「結局君の言いたいことは、本は利用するものであるということだね？」というひとことを聞いて五法則最初の法則である第一法則「図書は利用するためのものである。」がランガナタンの頭に閃き、あとの 4 つの法則がその後一気に書き上げられた。ランガナタンはその後 1928 年 12 月頃から講演や講座にてこの五法則を発表し始め、1931 年彼が 39 歳の時に The Five Laws of Library Science の初版を刊行した。1957 年には大幅に改訂し、

² 改めて送り出して頂いた国立大学図書館協会海外派遣事業事務局と東北大学附属図書館 (特に米澤誠・加藤晃一元部長ほか関係者) に感謝します。現地調査については、拙稿. IT 大国インドにおける学術情報流通の最新事情. 大学図書館研究. 2013, 98 (0), p.63-74. 及び S.R. ランガナタンの足跡を辿って : 生誕地から終焉の地までの図書館を中心に. 東北大学附属図書館調査研究室年報 = The Annual Reports of the Tohoku University Library, 2018, 5, p.115-129.にて詳しい報告を行った。

第8章「科学的方法, 図書館学とその進展」を加筆した第2版を刊行している。

4. 『図書館学の五法則』の内容

4.1 『図書館学の五法則』

○図書館学の五法則(The Five Laws of Library Science)

- 第一法則 : Books are for use (図書は利用するためのものである。)
- 第二法則 : Every reader his or her book (いずれの読者にもすべて、その人の図書を。)
- 第三法則 : Every book its reader (いずれの図書にもすべて、その読者を。)
- 第四法則 : Save the time of the reader (図書館利用者の時間を節約せよ。)
- 第五法則 : Library is a growing organism (図書館は成長する有機体である。)

4.2 『図書館学の五法則』の構造

4.2.1 ランガナタンの考える構造

ランガナタンは著作で、「図書館業務の基盤にあり、支えるもの」としての「五法則」イメージを示している(図1)。

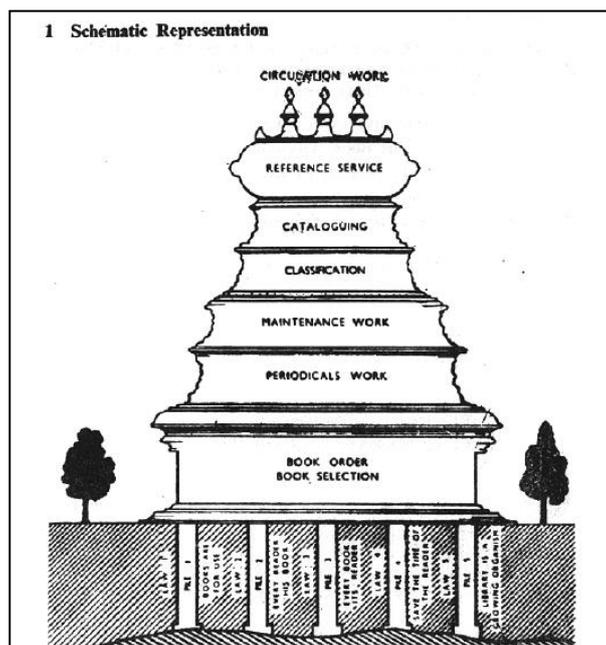


図1 五法則と図書館諸業務の構造³

この図での「五法則」は、基盤の岩から仏塔(の如きもの)を支える地中の五本柱となっている。その仏塔は図書館サービスを表わし、「図書の選書・発注」「雑誌業務」「図書館維持業務」「分類業務」「目録業務」「レファレンス・サービス」の6段を経て「貸出業務」

³ S.R. Ranganathan ; assisted by P. Jayarajan. *New education and school library*. Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, p.303, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4).

に到る計7段の塔として示される。注意であるが、『図書館学の五法則』は図書館の定義(例えば、図書館とは〇〇なものである。)を示しているのではなく、この図から分かる様に図書館業務を支える規範原理と考えるべきである。

4.2.2 竹内哲先生の考える構造

竹内哲先生は、著書の中で五法則を層状にして見取り図を示している。(図2) そこでは、五法則の基盤に「すべての人に教育を」という考えが基盤として存在していると指摘している。

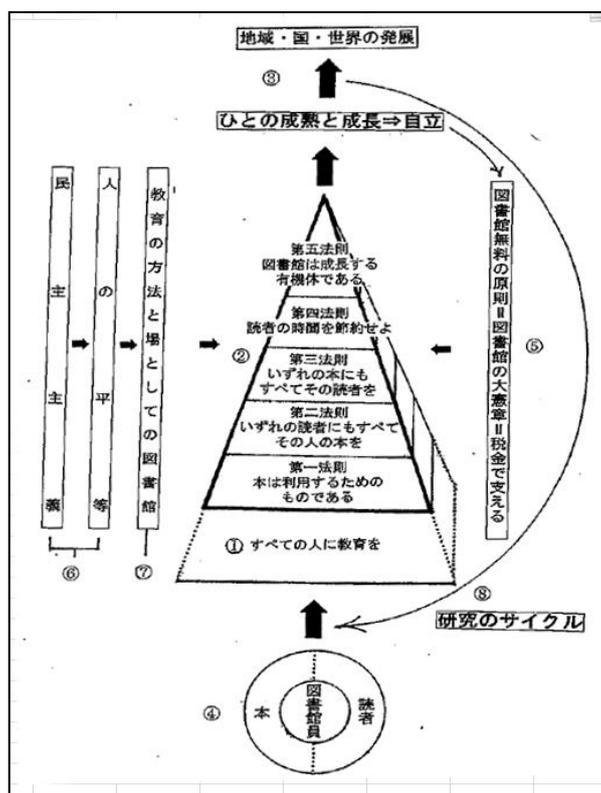


図2 竹内先生の描いた「五法則の構造」⁴

ここでの「教育」とは「通常一般の学校で先生に教える」という意味や「知識を教授して覚えさせる」という意味よりも大きなイメージであり、「人の成熟と成長への援助」の意味であると説明している。図書館とは「自分を育て、その人らしく生きていくこと」を目指すためのものなのである。竹内先生は以下のように述べている。

「その図書館がめざすもの、それは人が情報や知識を自由に入手し、それによって自らの成熟と成長を図って自立した人間となることです。しかし図書館はその目標に向かって人を引っ張っていくことはしません。そうすることができるように、一人ひとりに援助を提

⁴ ランガナタン [著], 竹内哲解説. 図書館の歩む道 : ランガナタン博士の五法則に学ぶ. 日本図書館協会, 2010. p.19.

供します。それがその人たちの努力によって、地域、国、そして世界の発展につながっていくのです。」

4.3 第一法則<<本は利用するためのものである>> Books are for use

かつては、写本による生産が中心であったので本は貴重なものであり、「保存」するもので「できるだけ見せないようにするもの」であった。その後の印刷革命で本は大量生産が可能になり、この第一法則「本は利用するためのもの」の時代になった。

第一法則が当たり前になることで、保存が主眼であると可能な限り効率的に収納する倉庫のような書庫が理想であったが、人が大人数出入りして読書を楽しめる空間を設置し、書架と書架の間は大きく取る、そして書架の高さは人の手が届く程度にする、といった建築や内装、家具の考えが一変する。

第一法則は、図書館に働く職員の性質も大きく変貌させる。保存を旨とした時代は図書館員とは火、水、虫、人間から本を守るのが仕事であり、倉庫番を務められる学識は関係ない職業であったという。が、「本が利用のためのもの」となると利用者に利用をさせる職業となるので、本を深く知り幅広い学識と教育者としての性質が必須となる。

4.4 第二法則<<いずれの人にもすべて、その人の本を>> Every person his or her book

現代の公共図書館が無料利用できるのはこの法則のお陰である。この第二法則は「民主主義」と、国民全員が教育を受けるという「義務教育制度」の発展とも大きく関わっている。「いずれの人にもすべて、その人の本を」の理由は、「すべての人に教育を」必要とするからである。そもそも「図書館とは何か？」を考えると、「図書館とは」第一法則から導き出した結果、「利用するために構成された本の集積」である。また「本」というものは、利用することによって利用者が「情報」を得て、そして利用者本人が教育されるためのメディアである。そこから本は教育的価値を持つもので、その意味で教育の道具と考える事ができる。その結果、「いずれの人にも教育を」という近代以降の公教育の概念を背景に、「いずれの人にも「自分を教育するための本を」となるのである。また著作によっては「図書は全ての人のも(Books are for all)」という法則がセットで第二法則になっている場合がある。この句があると第一法則から第二法則への流れが分かりやすい。

しかしこの第二法則(もう1つの第二法則も含めて)は、かつての考えである「選ばれた少数者のために教育、そして本を」は、少し油断するとすぐに頭をもたげる。例えば現代では、大学図書館の電子ジャーナルや公共図書館での電子書籍導入の格差がそれにあたる。行った大学や住んでいる自治体で、手に取れる図書の格差が大きいことは、第二法則の考えに反する。

4.5 第三法則<<いずれの本にもすべて、その読者を>> Every book its reader

第三法則は第二法則の逆で、そもそも自分からは動くことができない「本」を読者に

合わせろ、という法則である。この法則では主に図書館で図書館員が「本」を読者と出会わせる工夫について説明される。具体的には開架制、排架法、目録、レファレンス・サービス、図書館入口に新聞雑誌室を置くこと、広報、普及サービス、本の選択(選書)である。特に一番重視しているのは開架制である。現代ではオンラインカタログ(OPAC)や、CiNii Research といった記事検索システムも大いに第三法則を果たす仕事をしている。また、レファレンス・サービスも、人的サービスによって「本」を見つけてもらうようにするものである。また、そもそも利用者が利用しなさそうな本を選書しない、という観点で選書業務も第三法則の最前提となってもいる。

4.6 第四法則<<読者の時間を節約せよ>> Save the Time of the Reader

閉架書庫時代にはいかに読者の時間を空費したか、について、この時代に空費された時間をランガナタンは試算したところ、開架制の欠点である本の亡失を言い訳にするには、全く見合わない時間数だとする。

排列法、目録法、書誌と、読者が本を発見するのに有用な事はすべて時間を節約するものである。そのほか、分かりやすい書架の配置、そして充実した館内サイン、充実した書誌類の整備、現代では検索システムの配備も利用者の時間を大いに節約する。

電子化されオンラインで入手できる資料は、この第四法則の究極の具現化である。電子ジャーナル、電子書籍、機関リポジトリ、デジタルコレクションなどは、ランガナタンが見たら歓喜するに違いない。しかし一方、現代は膨大な情報が入手できる時代である。検索結果が多すぎて必要な情報を見つけないことや、そもそも各種検索サービスを知らないと時間の節約にならない。そのためにも人に相談できるレファレンス・サービスや、自分で探すことが可能になる利用者教育も図書館は行わねばならない。

4.7 第五法則<<図書館は成長する有機体である>> A Library is a Growing Organism

「成長する有機体」について、第一の意味は「大きさ」の変化である。近代図書館の3要素は、本、読者、館員であるがこの3要素、つまり蔵書量、利用者数、図書館員数が順番に「成長」していく。

第二の意味は「変容と進化」である。図書館はかつて「本を隠す場所」であったが、これまでの概観してきた図書館の歩みに従い、利用を旨にする図書館へ変貌し、現在は高度に特殊化した複雑な組織になっている。今の姿からはかつて「本の隠し場所」であったり「本を鎖でつないで見せる場所」であったりする姿が全く想起できない。これと同じように考えると、将来の図書館の姿はどのように成長するか誰も予想しえないのである。

第三の意味は、「種の形成」である。進化の成立から絶滅までをたどる系統発生を図書館に適用して考えることであるのだが、特定の機能を持つ専門図書館の発生について、を考えると分かりやすい。専門図書館以外に「保存図書館」と「利用を中心とする図書館」など様々に特化した館種が発生する。これらを「図書館種」という1つの成長する系統と見

なす。

次に第四の意味、「協調する図書館群」である。これはつまり数ある図書館達は距離的に離れてはいても、各々の特性を生かして緊密に連携しあうというネットワークを形成するようになることである。

現代での成長した図書館で、筆者が特に気になるものには以下のようなものがある。

- ・電子図書館→場所が無い。第四法則の究極の具現化(前述)。
- ・ラーニングコモンズ(一見図書館に見えない)
- ・図書館コンシェルジュ(図書館に関係ない相談にも乗る)
- ・オガールとか猫ノ図書館とか?(街おこしの一環等キャラを際立たせる。)
- ・TSUTAYA 図書館?(ブックカフェ概念の合流)
- ・課題解決型図書館(蔵書貸出禁止、作業場所としての活用)

以上成長し変化する有機体について列挙したが、それに反してランガナタンは種類が変わろうとも、これからも不変であるものがあると言う。それは「図書館がすべてに通じる教育の手段であり、教育に役立つすべてのものを集め、自由に伝達し、これらの手段とともに知識を伝播する」ことである。これは全ての図書館に内在するいわば「内なる人」であり、「永遠でありすべてに行き渡り、断固として不動、そして常に同じである。」と締めくくっている。

5. ランガナタンの教育思想と学校図書館観

5.1 教育の目的

ランガナタンは、教育の目的を次の様に述べている。

(教育の目的は) 共同体の各人が自らの得意分野の創造的能力を解放し、自らの手法でその力を発揮するようにすること⁵。

これによると、個々人が自らの特性を知り、秘められている得意分野の創造性を具現化することで、自らの能力を発揮することが理想状態であり、この実現に向けて人を教育せねばならないとしている。何かを強いられて、役目を果たす、というよりも、自己という独特な存在の「特性」をさらに発揮すること、そしてそれらを全員が出し合い、そして協力することで、社会を運営する、のがランガナタンの理想像である。そのために、教育者は、生徒に自らの特異的な力を解放・発揮することができるように教育をせねばならない。そしてその人らしい専門を持った者同士が、協力によって相互補完を行って、社会という共同体を運営すると述べている。

⁵ Ranganathan ; assisted by P. Jayarajan. *New education and school library*. 2006, c1973, p.35.

5.2 教育を巡る状況

ランガナタンは、以上の目的と比較して現状は以下のように考えている。最初に挙げるのは、子供時代とは抑圧に満ちており、その中心こそ学校であるという指摘である。

子供時代とは抑圧の連続である。家でも、遊んでいても。ああ、そして最悪であるのが学校である。大人になり、もし子どもの頃の興味関心が幾らかでも残っているのであれば、その興味関心を再度成長させる機会があるかもしれない。(中略)平均以上の回復力を持つ人であれば、その興味関心は回復することができる。しかし、平均以下の人々は、傷ついたまま終わってしまう⁶。

次に個性を無視した一斉教育・記憶トレーニング的な教育内容に対する批判である。民主主義の発展に伴い、一般教育が19世紀から進展し、モニトリアルシステムやギャラリー制といった一斉授業方式の導入で急激に教育というものは大人数を一斉に教育するという形になった。その時期に、年齢が同じなどの画一的な基準で学級という大集団を構成し、個体差を考慮しない教育を行う様になったと述べている。これにより多くの落ちこぼれを生み出し、能力がある子どもを飽きさせるといった結果をもたらした。これは教員が講義した内容を画一的にノートに取るだけ、そしてノートの内容を暗記させ試験をするだけ、という教授方法に大きな問題があるとする。学校を出た後、単に暗記させられた知識は、応用がきかず、陳腐化してしまうことから、無駄になることも多く、これは学校教育の失敗であるとしている。

また、科学の発展に比例して、年々教えなければならない内容は、増加することになる。科学の発展に応じて内容を増やし続けていると、教育現場では授業時間不足となってしまう。

また、学生時代にだけ学ぶ時間が集中していることについて、ランガナタンはこれをラクダ理論(Camel Theory)として、批判している。このラクダ理論とは、旅人が砂漠を横断する際に、ラクダに生活物資を全部積みこんで、行程中にその物資を消費して目的地に無事到達する過程を、人間の成長と教育に例えたものである。

5.3 問題に対する処方

以上挙げてきた教育を巡る状況、いわば問題に対して、ランガナタンは本来の教育とは何か、の観点で処方を示している。最初にその箇所を提示し、各論についての主張をまとめる。

教育とは、

⁶ Ranganathan. *Education for Leisure*, 4th ed. Asia Publishing House, 1961, p.45, (Ranganathan series in library science, 8).

1. 記憶トレーニングではなく、学校図書館の活用による外部記憶装置の使い方トレーニングであること
2. 同じスピードで、同じことや情報を学ぶような大人数の一斉授業ではなく、学校図書館の活用による個人の興味関心を自分のペースで学ぶような個人指導学習であること
3. 受動的に抑圧的に孤独に部分的な内容を学ぶのではなく、学校図書館の活用により活動的に実験的に創造的に、そしてグループ学習的に広い分野を学ぶものである⁷。

最初の処方は、図書の教育である。ランガナタンは、記憶トレーニングである知識の詰め込み教育の問題を解消するため、外部記憶媒体である図書等のメディア⁸の使い方を生徒に身に着けさせることこそが、教育であるとしている。つまり可能な限りの知識を生徒に暗記させるのではなく、「どこに行けば」「何を見れば」「どのように探せば」必要な知識を入手でき、直面の問題を解消することができるかをトレーニングすることが、長い人生を生きるためにはより有益であると考えている。

人間の暗記できる量は限られており、覚えた知識も時間が経てば陳腐化する。しかし図書が代表する情報メディアの使い方さえ身に着けていれば、どのような時にでも新しい情報を入手し、いつでも学習は再開できるのである。これはまさに現在の情報リテラシー教育と同じ考えである。情報入手とその利用方法を教育現場では教え、学校卒業以降は図書から情報・知識を摂取することで自らのペース、タイミングで自学自習を進めることができるようになる。

そして図書こそ、成人学習におけるいわば教師に当たるもの、とも述べている。子どもの学習は、周囲を模倣したり反面教師としたりして育つ。これに対し成人の学習は、専門的になり深い内容になるため、興味関心が同じにして、いわば先達にあたるような人が身近に居る可能性はかなり低い。そのため周囲の人間を模倣するという子ども型の学びができない。

その代案が時間と空間を超える図書というメディアを活用することである。これにより成人の専門的な興味関心に応えることができるとする。すなわち子ども時代に、図書の活用を、学校図書館を場所にして身に着けておくことで、成人になってからの高度に専門化された興味関心を、自らの力で満たすことができるのである。

図書というメディアを使った自学自習は、一生涯学ぶことを可能にするものである。この自学自習能力の育成を教育の大目標に据え、学び方を教えることを教育の中心とすれば、成人になってからも自ら学んでいくことが可能となる。

⁷ Ibid. p.108.

⁸ *New Education and School Library* では、外部記憶媒体(externalised memory)は参考図書(reference books)としている。これは調べものをするための本ということが念頭に置かれているのだが、一般の図書でも同じことは言え、後述するように、図書とはこれまでの思考エネルギーが詰まったメディアであると考えれば、大概概念である「図書」と考えて良いはずである。

5.4 ランガナタンの学校図書館思想

以上、「図書」による自学自習能力の育成のために、ランガナタンは学校図書館が教育の中心になることを提唱している。先に挙げた教育の定義に必ず「学校図書館の活用」とあるのはそのためである。

この考えは、ジョン・デューイ(John Dewey, 1859-1952)の『学校と社会 (School and Society)』に基づいている。ランガナタンによる「学校の中心にある図書館」(図3)の説明によると、子ども達は学校の各種の実践の場にて得た知見・経験を、学校の中心にある学校図書館に集まって来て、そこで図書を読み、ディスカッションや教諭への質問によって、より学びを深める。学校図書館にある図書などの資料群が、子どもの内面の核を刺激し、さらなる自己教育を促す。

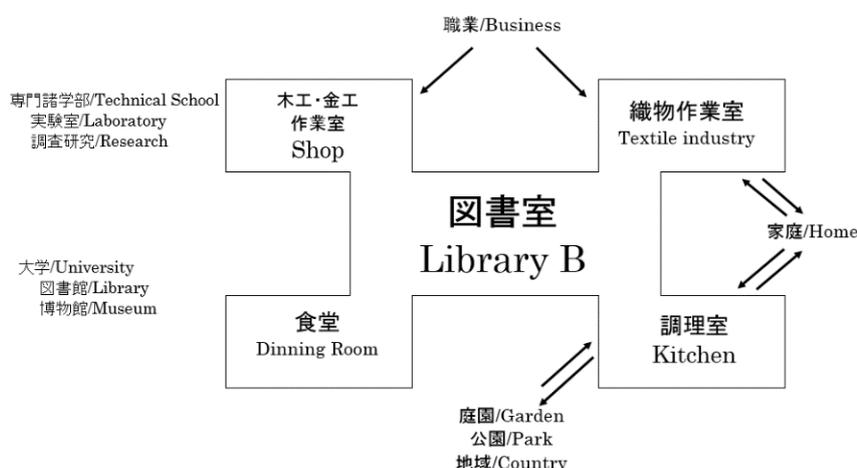


図3 学校の中心にある図書館⁹

学校図書館は、まさに生徒たちの成長の場となり子どもの個性を抑圧することなく、自主的に自らの成長を生成させるような場となるのである。1人1人がそれぞれの個性に基づいて試行錯誤し、様々な話題に対応できる多くの図書から学ぶこの方法が、成人になってからの図書による学習のトレーニングになるのである。

以上まとめると、図書館を場所とし、複数名のグループでプロジェクト的に学ぶことが、お互いの得意不得意を補完し合い、個性の多様性をかえて魅力的なものにする。その中で生徒は社会性を養い、皆が一緒に成長するという感覚をも養うことになる。

⁹ John Dewey. *School and Society*. John Dewey, *The Middle Works*, v.1: 1899-1924. Southern Illinois University Press, 1976, p.49.

邦訳は、ジョン・デューイ著; 毛利陽太郎訳『学校と社会』1985, p.112.から当てた。Ranganathan. *New education and School Library*.では p.79.

5.5 晩年の言葉

ランガナタンの教育観を示す次の晩年の言葉がある。

私は、教育の専門職として働く間、現場の実践から次のことを学んだ。

1. 教育とは、結局自己教育であるべきこと
2. 好奇心は自己教育の原動力となること
3. 教師の基本的な役割は、生徒の好奇心を喚起すること
4. 好奇心は、生徒一人一人によって異なること
5. 自己教育に必要な好奇心は、いわゆる「教育不可能な生徒(Un-educable)」や「愚鈍な生徒(Dull)」であっても喚起可能であること

これは偉大な物理学者アルバート・アインシュタインの言葉である「天与の好奇心(Divine Curiosity)」の意味を理解させる経験であった。私は、図書館の中心(Hub 発表者注：ここでは「レファレンス・サービス」＝「ドキュメンテーション・サービス」の意味)にあるものが、一人一人の好奇心を満たすことができるべきである、と考えるのである¹⁰。

これによると教師が「天与の好奇心」を刺激し、図書館がそれを満たす、という対応構造になっている。あたかも野球に例えると、ピッチャー(教師)が投げたボールをキャッチャー(図書館)が捕球するようなものである。

5.6 以上を受けての提言：GIGA スクールと電子書籍

現在国策で、小中高の児童・生徒1人1端末を使わせて学ばせるようなGIGAスクール構想が急速に進展している。この機会は大きな転機であると考えているが、これは児童・生徒は自分の端末から電子書籍・論文を自在に入手し、閲覧が可能になるからである。もし端末から大量の資料が閲覧可能になれば、児童生徒の探究学習は飛躍的に質が強化されるどころか、従来からの読書振興も全く違った形で進むはずだ。

一方、図書館側では、感染症対策のために電子書籍サービスを急遽開始させた館も多い。しかし慌てて単館あるいは小規模自治体が開始したこともあり、狭い範囲での1館当り千冊以下程度の公開に留まっただけではないであろうか。そして、電子書籍サービスを開始できる図書館とできない図書館との格差も発生する。第二法則はすべての人にその本を提供することを命じているが、第二法則のアンチテーゼである「選ばれた少数者のためにその人の本を」が再開されている。

¹⁰ Ranganathan. *Documentation: Genesis and Development*. Vikas Pub. House, 1973, p.75, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 3).

県立長野図書館が提供する「デジとしょ信州」¹¹は、長野県全体に約1万8千点もの資料を公開するサービスである。県下の公共図書館が協力して、1つのプラットフォームを経費分担で運営している。このようなサービスで、「利用」の格差を埋めて行くべきである。

もし「デジとしょ信州」のようなサービスをどの都道府県でも網羅的に導入することができれば、全国の児童・生徒たちは自治体の格差無く自分の端末から読書や調査が可能となる。そもそも電子書籍は、配信サーバがその自治体にある訳ではない。小規模自治体の小規模図書館が単館で契約する必然性は無く、取りまとめ館が県全域のサービス導入と契約を実施し、広い範囲で共同購入することが理想なのではないか¹²。その結果、ランガナタンが理想としたものが実現する。

6. おわりに

発表者は竹内哲師の著作により好奇心をさらに刺激され、主に職場の図書館である東北大学附属図書館等から借りてランガナタンの原著を、時間をかけて講読した。その後インドに2回至り、販売中の著作を全部購入した。その後10年経ったが、ランガナタンの多作さゆえにまだ完読していないものも多い。今後の半生をかけて一層講読と探究に励み、竹内哲師の開削した山の一層高みを目指したいと考えている。

¹¹ 県立長野図書館. “デジとしょ信州：(市町村と県による協働電子図書館)”. 県立長野図書館ウェブサイト.
<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/collection/elibrary/shinshu-kyodo-library.html>, (参照 2023-03-09).

¹² 大規模国立大学の場合、附属図書館が音頭を取って各部局から分担金を集めて電子ジャーナル契約を取りまとめたケースを念頭に置いている。